

農業は須らく
着實なるを要す。
日本から來たての人は、殆んど
一様に云ふ言葉に「アラカルの農業
は難博だ」といふのである。そ
の理由を聞いて見るま、一文無し
が急に金持となつたり、金持が一
敗地にまみれて、再び起つてこが
出来なかつたりするからだ、と云
ふのである。

然らば其の人々は、意うる危
険を踏まないかと云ふ、事實は
全くさうでなく、補が良いと云へ
ば補作に走り、米が良いと云へ
ば耕作にかたむき、野菜が儲かると
古い例ではあるが、三十年ほど
前、北米へ日本移民が自由には
入れた時分に、土地を買つて自分
の土地に自分で耕作する云ふ者
は殆んどなく(其の當時は日本人
でも土地は買へたが)、全部が謂
うる出稼移民で、米が値が良いと
云へば米作に拘り、馬鈴薯が儲
かると云へば耕作に拘り、野菜
類が良いと云へば野菜栽培に走り
であるから、比較的の地主兼自作農
文者でも三、四年耕地で歸らなければ
生産过剩と競合ひして市價な極度
に落し、結果共倒れの失態を演じ
て轉々職を變へては、また同じ事
を繰返したものである。

アラカルの農業者たるが令後何
ううのは、大いに注目に値する
農業者も確実であるが、之

の本紙一週二回發行

農業者も確実であるが、之

世界一周今昔物語

大記録が完成される迄

カナ文字ミ漢字
カンバラ M・T 生

第二世者の一人生として、第
全周 一文字に變へてこそ
二世が漢字を習得するの困難を
な思ふさき、故國の國定教科書な
そのまゝ使用するの不可を痛
切に感するのです。
漢字はそこからく在伯第二世にさつ
て、縁遠い存在であることは疑へ
ません、そしてこの事は、第二世
の國語問題に重大な關係をもつ
のです、何故ならば漢字の習得は
不斷の習熟による外、全く困難だ
からです、だからといって漢字を
國 五 由つて國民志趣は
しなばれ、又保たれ
て行かず、あるのです、その國語

は、否も事は出來ないと思ひます。従つて、カナ文字のみによろさき私は只現在の漢字までの文を單にカナ文字に書きあらためて、それで讀むと思つたら大きな間違ではないでせうか。

事實、今日の文章は、漢字がある故に理解し得られるのであって、翻してそれをそのままカナ文字、或ひはローマ字に書き換へたのは意味なきなのです。ましてそれが、感情の發表である私達は、漢字が、過去二千年の間に我々民族の中に浸透し來つたことをよく考へなければなりません。私達の思想乃至感情は文字によってより一層生々々明白になると得られるのであつて、現在の我々に之つては、思想よりも文字が先にあるのです。そして文字(漢字そのもの)の中に云ふざらざる意味を含んでゐるのである。我々の思想は、それによつて發展し、深められるのです。(未完)

によって體臭に自然的變化の現
はることは事實である

「あんた、あの大きな帽子をつける人が邪魔になりやしない？」
が漢字を元にして成立してゐることは、否も事は出来ないと思ひま
す。場合において、尚更です。
私は、漢字が過去二千年の間に
かつたんですもの」

歐米の女の粗(ほい)い、しかも體(からだ)のやうなのは其(その)まゝにならない
佛人が、東京女を世界(ぜいせき)で最も
歎(たん)美(び)にまでうたつて、その能(のう)
の美(うつく)さをたゞへてゐるな。併(あわ)せて
あげて行けは限りがないが、アーリヤン
民族(みやぞく)より、東洋人の皮膚(ひゆう)
の方がはるかにすぐれてゐる。
ことは、いかがな事實(じじつ)である。美(うつく)
人は、外(ほか)見(み)的(てき)に男(おとこ)の姿(すがた)
とはなりうる。いま假(か)りにそ
の皮膚(ひゆう)に不快(ふくわい)な條件(けんじょう)
らば、その所謂(いわゆる)美人(うつくしこともの)
は、究極(きゅうきょく)的に異性(うきょうせい)の愛(めぐみ)がもて
は、究極(きゅうきょく)的に異性(うきょうせい)の愛(めぐみ)がもて

儀が、その分物が達ふからだ
同性間では、さまで氣づかない
程度の臭氣でも、異性には殊の
外強く嗅覚を挑戦する、くらや
みの中でも、匂によつて女性の
存在を、認めることが出来る
で、とにかく、女性特有の體臭
が、異性に對して一種の魅力と
なつてゐるのは事實で、思春期
の女性の體臭、異性をひきつけ
すにはむかむところのあの甘い
體臭は、動物共通な「然の現象」
であつて、成女、老女、そその年齢
によつて體臭に自然的變化の現
朝の就勤の鐘を全圖に勵らくアグドス
センダニ生活は將來此の國で活躍する
人達にそつては尊い意義の「一極化」
式であるこ考へられま。こうした
た規律に依つて勵らく義務農業年金
を通ずる事は、新らしくアラジン
に生活を始める新移殖民の過程
として意味深いものであります。
餘り放逐生活にみたされ切つた
人達には本統の自由を喰ふ事は
來ません。しかし身の活動もならな
い現象を起しきった生活の中に、
眞の自由は分在して居ります。
眞の自由は分在して居ります。
眞の自由は分在して居ります。

歐洲人と黒人の皮膚を、布にたまへる。木綿と絹の感じだらう。黒人のがきめ細かく、やわらかく、滑めらかなのに、歐洲人が魅惑するを感じ、見るからに怖い。さうな黒人坊の女と同様に、たりするには、おながち、獣畜的趣味ばかりではないのである。

今を距る四百年の昔一五二三年の九月八日、スペインのセヴァリオリア港に入港した一隻の船があつた。世五名の乗組員は、何れも顔は黒い風に焼け、赤黒い、ひげは伸びて、異なる形相にやつれ果て、ゐる。これこそ三年前、フェルナンド・マゼラン指揮の下に、同じセヴァリオ港を出帆し史上最初の世界周航を終へてなつかじの故郷に歸還した、暗めの勇士等の姿であつた。

く横切つて、また、間にニヨークに歸りついた。總距離一萬五千四百七十四哩、所要時間八日十五時間五十一分、かくして、先人未到の歴史的記録となつた。

の會技競上陸伯日
graficos

The logo for Casa Fototú is displayed prominently at the top of the page. It features a stylized graphic of a rooster and a horse facing each other. To the left of the graphic, the word "CASA" is written in a bold, lowercase, sans-serif font. To the right of the graphic, the word "FOTOTÚ" is written in a large, bold, lowercase, sans-serif font. A diagonal line or brushstroke cuts across the "T" and "O". Below the main title, the address "SÃO PAULO - R. SÃO BENTO, 45" is written in a smaller, all-caps, sans-serif font.